

ご自分が神であることを明言されたイエス

ヨハネ福音書5:19-23

【新改訳2017】

- 5:19 イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。
- 5:20 それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。また、これよりも大きなわざを子にお示しになるので、あなたがたは驚くこととなります。
- 5:21 父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。
- 5:22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました。
- 5:23 それは、すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません。

【祈りながら考えよう】

- (1) 19節の「自分から何も行うことはできません」とはどういう意味ですか。
- (2) 20節の「これよりも大きなわざ」とは何ですか。
- (3) 23節の「父を敬うのと同じように子を敬う」とはどういう意味ですか。

【解説】

(1) 極めて親密な関係

主イエスはご自分のことを「子」と言い、神のことを「父」と言っておられる。この個所ほどに、神との関係を、父と子との関係として語っておられるところは、福音書のどこを捜してもない。まず主イエスは、こう言われた。

《まことに、まことに、あなたがたに言います》(19節a)

(英訳 Verily, verily, I say unto you, / KJV) [verily: 確かに、まことに]

この表現は必ず、特に深く、重要性を持った発言に先立って用いられる。

《子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。

すべて父がなさることを、子も同様に行うのです》(19節b)

父なる神と主イエスの関係は、ここでは主が語っておられる通り、極めて親密である。昔、旧約の預言者は、神によって示されたことを語ったが、主イエスは神の子として父なる神がしておられることをご覧になって行われた。

この御言葉は、御父と御子なる神との間にある「完全な一致」を宣言している。

「自分から何も行うことはできません」とは、助けなしに、自力ではできないという意味ではなく、自発的に自らの意志でしないという意味である。

御父と御子は、全く一体であるので、一々二つの位格(人格)でありながらひとりの神であられるので一々御父がなさることは御子もまた同様になさるのである。それゆえ、主の行為は、御子独自の行為ではなく、御父の行為でもある(ライル福音書講解ヨハネ①)。

◎クレアー・ホール(ケンブリッジ大学教授/1974年)は次のように説明している。

「御子と御父は、一つの分割できない本質であり、その行為も分離できない。御子は、御父の意志と行為なくして、何もすることができない。人間になっていても、天の父の意志と目的に合致すると思われること以外はすることができないのである。」

◎アウレリウス・アウグスティヌス(354-430年)は次のように述べている。

「主は、御父がなさることはすべて御子も、何かそれに似たようなことをすると**言わずに、それと全く同じことをする**と言っている。もし御子が、同じことを同じようにするなら、ユダヤ人たちは沈黙し、キリスト者は信じるであろう。しかし異端者は認めないであろう。『御子は御父と同等である』ということ。」

(2) 心と愛情の一致

《それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです》(20節a)

この節は前節で提起した、御父と御子は1つであるという考えを引き続き論じている。「父が子を愛し」とか「子にお示しになる」という御言葉を読んで、この御言葉が、御父と御子の聖なるご性質と本質に関して、何か御父が御子より優れ、御子が御父より劣っていることを意味するのでは決してない。

ここで使われている「愛」は、この世の両親の、愛する子に対する愛ではない。「示す」は教師が無知な学生に示すのとは違う。この「愛」は、御父と御子の間に永遠から存在し、今なお存在する、ことばには尽くせない心と愛情の一致を我々に示そうとされている。

また、この「示す」は、御子がこの世においてになった時に行うあらゆる働き、すなわち仲保者の職務を行い、罪人を救う働きに関して、御父と御子との間には、完全な信頼と協力があったという意味である。

(3) 「これよりも大きなわざ」とは

《また、これよりも大きなわざを子にお示しになるので、あなたがたは驚くこととなります》(20節b)

さらに救い主は、神はこれよりもさらに大きなわざを行われるが、それは人々が見て驚くことになる、と言われた。彼らはそれまでも、主イエスが奇蹟を行うのを見ていた。

38年間足がなえていた男をいやされるのを彼らは見たばかりであった。しかし、これよりももっと驚くべきことを見るようになる、というのである。

これから示される「これよりも大きなわざ」とはどのようなわざか、次の2つの節に明確に示されている。そのわざとは、「いのちを与えること」と、「さばくこと」である。そして実際、ユダヤ人たちが、「いのち」を与える働きに「驚くことになり」、当惑している様子は、使徒の働きの中に記されている(使徒4:1-22、9:37-42等)。

それ以上に、キリストが再臨され、異邦人をさばき、エルサレムを再興し、イスラエルを集め、ユダヤ人の不信仰を悟らせ、地のおもてを新しくされる時、ユダヤ人たちは主のさばきのみわざに「驚くこと」であろう。

(4) いのちを与え、すべてをさばく権威を託された

《父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。

また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました》(21-22節)

御子と御父が等しいことが、ここで改めて述べられている。イエスは自分を神と等しいものとしている、とユダヤ人は糾弾した。その告発を主は否定せず、むしろご自身が御父と等しい事実を示された。

御父が死人をよみがえらせて、いのちを与えるように、御子もご自分が選んだ者にいのちを与える、という。もし主が単なる人間であったら、このようなことは誰も言えない。

また、新約聖書は、父なる神がさばきの役割を御子にすべて託された、と教えている。主イエスがそうするためには、言うまでもなく、すべてを完全に知り尽くし、非の打ち所のない義を備えていなければならない。また、人の心の思いと動機を識別する能力がなければならない。

(5) 父を敬うように子を敬う

《それは、すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。

子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません》(23節)

神が御子に、死者をよみがえらせ、世界をさばく権威をお与えになった「理由」がここに書かれている。その理由とは、すべての人が、御父を敬うように御子を敬うためである。これは、主イエス・キリストの神性を示す。

聖書は至るところで、礼拝されるべきお方は神のみである、と教えている。十戒は、イスラエルの民が唯一のまことの神以外、いかなる神を持つことも禁じている。

ところが、ここでは、御父を敬うように、すべての人が御子を敬うようになるかと教えている。この個所から導かれる唯一の結論は、「イエス・キリストが神である」、ということである。

神を礼拝している、と言いながら、その実、イエス・キリストが神であることを否定する人は多い。彼らは、イエスは立派な人物であった、とか、今まで生きた人の中では誰よりも神に近い人であった、と言う。

しかし、この御言葉は御子を「御父と等しい立場」に置いている。それだけでなく、人は父なる神にささげるのと同じ礼拝をイエスにささげるようになる、と言っている。

(6) 三位一体の認識の重要性

三位一体という言葉は聖書にはないが、マタイ28章19節にその事実がある。

《ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名(名は単数形)において彼らにバプテスマを授け》

(Therefore go and make disciples of all nations, baptizing them in {Or <into>} the name of the Father and of the Son and of the Holy Spirit.)【NIV】

多くの、良い意味でのキリスト者たちが、三位一体の神を知らないで、三神論者、つまり三人の位格(人格)の神を別々に礼拝する者たちであるということは、憂慮すべきことである。

彼らはまるで、罪人に対する父なる神の意志と、子なる神の意志は別物であるかのように、つまり、まるで御父は人間を憎み、御子は人間を愛し、保護されるかのように語る。そのような人たちは、聖書のこの部分を学び、御父と御子の一体性に注目すべきである。

三位一体は、「三神」(三人の神々)ではない。また「父と子と聖霊は、神の三つの様式でしかない」とか「神が三役をしている」といった考え(様態論)も否定されるので注意が必要である。

三位一体の関係説明図

